

令和4年度(2022年度)事業評価

(大項目) 1. 地域の歴史・文化・自然遺産を守り、未来へ伝える博物館									
目標		吹田市に残された大切な歴史・文化・自然遺産などの地域の文化に関する資料を継続的に収集、整理し、市民共有の知的資産として未来にも利用できるように保管管理します。また、地域の歴史と文化に関して調査研究を推進し、その研究成果が市民の知的財産として活用されるようにします。							
(中項目)①資料の収集・保管・活用				自己評価点	【自己評価】	自己評価点	【外部評価】	外部評価点	
(小項目)	(重点項目) a. データベースの構築	指標・目標	データベース構築の進捗度	A	《資料の収集・保管・活用》 資料データベースの構築・公開に関する事業計画書及びシステム化計画書を提出し、令和5年度予算の計上を行った。いづれも事業実施の承認を受け、予算も認められた。令和5年中にデータベースを公開予定。 重点収集資料は、市内の個人宅より大坂画壇関係の資料と考えられる屏風、万博関連資料の寄贈があった。また70年前の吹田事件に関する裁判資料等を一括して寄贈を受けた。 [重点収集資料]大坂画壇関連資料 3点、万博関連資料 1点 [歴史] 454点(資料総数 23,071点) [美術] 12点(資料総数 1,727点) [考古] 42点(資料総数 4,2393点) [民俗] 105点(資料総数 4,198点) 新規収蔵資料を対象に年2回の燻蒸庫燻蒸と、本年度は収蔵庫燻蒸を実施年度のため、特別収蔵庫と一般収蔵庫を対象に燻蒸を実施した。どちらも良好な結果となっている。 《調査研究》 橋本家文書調査は令和5年度春季特別展図録で成果を公表した。市内美術資料調査は新たに市民参画の形で実施した。 大規模改修に伴う常設展示大規模リニューアルに向けて、博物館利用の市民意識調査を令和5年度に行うべく、予算計上を行った。他館の動向は引き続き調査を行った。 本年度の学芸研究会は、2本の研究発表を行った。「野外彫刻」は本年度新たに取り組んだ市民との協働による市域の野外彫刻の所在と現状把握の調査報告で、得られたデータの今後の活用方法も示された。千里ニュータウン初期における芸術活動の一面を掘り起こした点で有意義であった。「橋本家文書」は令和5年度春季特別展のテーマであり、展示準備の現状と課題についてであった。古文書をいかに分かりやすく展示するのか、活発な意見交換が行われた。 ・「千里ニュータウン内の野外彫刻ーすいた野外彫刻部調べ」(河島) ・「『(仮題) 橋本家文書展』について」(池田)	A	寄贈資料の受け入れ、資料の燻蒸や館内環境の調査、データベースの整備等、指標・目標どおり順調に実施した。コロナ禍で博物館活動が制限される時期が続いたが、この期間中は博物館のあり方について様々な角度から見直す時期であったと思う。博物館は日常業務に追われることが多いが、IT問題に関することなど、評価項目にある「未来へ伝える」に対応したアクションであり、将来のために重要である。 資料データベースの構築・公開に関する事業計画が令和5年度予算で認められ、令和5年度中には公開まで実施できる見込みを立てられたことは大きな前進である。データベースの整備・公開は、市民による利用環境を格段に改善するだけでなく、博物館の効率的な運用にも大きな利便性を与えるものである。これから、データベースのシステム構築化が本格化し、ゆくゆくは市民に公開され、市民が活用できることへの期待が高まり、データベースの公開を待望している。ただ、データベースは予算計上を行っただけでは実績として評価できない。どのような構想をまとめて予算申請に臨んだのか、その構想の完成度をアピールしてほしい。 資料収集については、購入予算も確保し実施しており、橋本家文書等の寄贈資料の活用も確認でき、厳しい状況の下でも資料の収集を着実に進めていることは高く評価できる。ことに吹田事件の裁判資料等が一括して寄贈された意義は、もつと注目されてよいのではないかと。すでに関連した講演会が開催されているが、吹田事件の裁判資料を中心にした特別展を開催するなど、今後の活用が期待される。 調査研究および研究会は指標・目標どおりを実施している。地域史調査研究においては、特に橋本家文書調査が光彩を放っている。橋本家文書に関わる5年度の春季特別展と複数回に亘る講演会が大盛況となったが、そこに至る博物館関係者のエネルギーと誠意を感じさせる内容で、大いに評価できる。また「野外彫刻調査」も千里ニュータウン初期の芸術活動掘り起こしに寄与した点で充分評価できる。 所蔵資料の収蔵環境維持のため、特別収蔵庫及び一般収蔵庫を対象に今回も適正に燻蒸等を行っている。しかしながら、重点資料収集も燻蒸も博物館としての基幹は維持していると言えない、特筆する評価ではない。調査研究の成果についても地域、内部への発表だけでなく、外部への貢献としての発表を期待する。そこで得られた意見が地域の財産になるはずである。		
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) b. 資料の収集	指標・目標	収集方針に基づいた資料収集を行い、適切に整理・登録を行っているか。	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) c. 収蔵環境の維持	指標・目標	新規収集資料燻蒸回数(2回/年) 館内環境調査回数(2回/年) 収蔵庫燻蒸回数(1回/3年)	A					
		実績	新規収集資料燻蒸回数 2回 館内環境調査回数 2回						
(中項目)②調査研究									
(小項目)	(基本事業) a. 地域史に関する調査研究	指標・目標	調査研究件数 12件	A	本年度の学芸研究会は、2本の研究発表を行った。「野外彫刻」は本年度新たに取り組んだ市民との協働による市域の野外彫刻の所在と現状把握の調査報告で、得られたデータの今後の活用方法も示された。千里ニュータウン初期における芸術活動の一面を掘り起こした点で有意義であった。「橋本家文書」は令和5年度春季特別展のテーマであり、展示準備の現状と課題についてであった。古文書をいかに分かりやすく展示するのか、活発な意見交換が行われた。 ・「千里ニュータウン内の野外彫刻ーすいた野外彫刻部調べ」(河島) ・「『(仮題) 橋本家文書展』について」(池田)	A	寄贈資料の受け入れ、資料の燻蒸や館内環境の調査、データベースの整備等、指標・目標どおり順調に実施した。コロナ禍で博物館活動が制限される時期が続いたが、この期間中は博物館のあり方について様々な角度から見直す時期であったと思う。博物館は日常業務に追われることが多いが、IT問題に関することなど、評価項目にある「未来へ伝える」に対応したアクションであり、将来のために重要である。 資料データベースの構築・公開に関する事業計画が令和5年度予算で認められ、令和5年度中には公開まで実施できる見込みを立てられたことは大きな前進である。データベースの整備・公開は、市民による利用環境を格段に改善するだけでなく、博物館の効率的な運用にも大きな利便性を与えるものである。これから、データベースのシステム構築化が本格化し、ゆくゆくは市民に公開され、市民が活用できることへの期待が高まり、データベースの公開を待望している。ただ、データベースは予算計上を行っただけでは実績として評価できない。どのような構想をまとめて予算申請に臨んだのか、その構想の完成度をアピールしてほしい。 資料収集については、購入予算も確保し実施しており、橋本家文書等の寄贈資料の活用も確認でき、厳しい状況の下でも資料の収集を着実に進めていることは高く評価できる。ことに吹田事件の裁判資料等が一括して寄贈された意義は、もつと注目されてよいのではないかと。すでに関連した講演会が開催されているが、吹田事件の裁判資料を中心にした特別展を開催するなど、今後の活用が期待される。 調査研究および研究会は指標・目標どおりを実施している。地域史調査研究においては、特に橋本家文書調査が光彩を放っている。橋本家文書に関わる5年度の春季特別展と複数回に亘る講演会が大盛況となったが、そこに至る博物館関係者のエネルギーと誠意を感じさせる内容で、大いに評価できる。また「野外彫刻調査」も千里ニュータウン初期の芸術活動掘り起こしに寄与した点で充分評価できる。 所蔵資料の収蔵環境維持のため、特別収蔵庫及び一般収蔵庫を対象に今回も適正に燻蒸等を行っている。しかしながら、重点資料収集も燻蒸も博物館としての基幹は維持していると言えない、特筆する評価ではない。調査研究の成果についても地域、内部への発表だけでなく、外部への貢献としての発表を期待する。そこで得られた意見が地域の財産になるはずである。		
		実績	地域資料調査 15件						
	(基本事業) b. 博物館運営に関する調査研究	指標・目標	調査研究件数 3件	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) c. 学芸研究会業)	指標・目標	学芸研究会実施回数 (2回/年)	A					
		実績	学芸研究会実施回数 2回						

(大項目) 2. 地域文化の情報発信拠点としての博物館									
目 標		地域の歴史と文化を紹介する常設展示と幅広い利用者層が楽しみ、参加、体験できる企画展示により市民の多様な学習活動に応じるとともに、市民の多様な自主的学習を支援するための生涯学習の拠点とします。また、地域の文化の情報拠点の役割を担い、他の博物館、文化施設とも広く連携を図ります。そのため、博物館の情報公開性を高め、地域文化に関する資料や博物館運営に関する情報を迅速に発信公開します。							
(中項目)①常設展示				自 己 評価点	【自己評価】 《常設展示》 資産経営室の個別施設計画により大規模改修は令和9年度実施設計、10年度工事の予定となった。資産経営室との協議において、常設展示リニューアルにむけて博物館利用に関する意識調査が必要とアドバイスがあり、令和5年度予算にコンサル委託費を計上したが、見送られたため6年度予算として再計上する予定。 「さわる月間」は企画展『西村公朝 挿絵原画の世界』(6月18日～7月10日)と同時開催で実施したが、市民ボランティアとの協働によるイベントは行わなかった。 《企画展示》 企画展示は、春季特別展・企画展・夏季展示・秋季特別展・特別企画の5回を実施した。秋季特別展「神崎川展―川港・吹田の物語―」は2度の中止を経て開催、夏季展示は市民実行委員会も再開し開催できた。また、本年度は千里ニュータウン60周年にあたることから千里ニュータウン情報館・豊中市と共催で巡回写真展「わたしたちの千里ニュータウン」を実施した。西村公朝資料の活用では、令和2年以來、たびたび中止となっていた企画展「西村公朝 挿絵原画の世界」を開催。著作物における業績を紹介する機会を得た。西村公栄氏による2回のトークイベントをオンライン講座として公開。展覧会終了後、西村家より挿絵10点と所用印9点の寄贈を受けた。 《地域学習の支援》 イベントの回数は指標を上回ったが、参加人数は指標値には達していない。新型コロナウイルス対策のためイベントの参加人数の定員を制限したことも要因であろう。オンライン講演会・講座には特別展開連講演会等の録画を新たに8本のコンテンツを追加した。公開中の38本のコンテンツの年間総視聴回数は78,282回であった。出前講座は講師派遣の回数は昨年並みだが、参加人数も指標値を下回っている。講師派遣先は図書館、地区公民館、市民センター、コミュニティセンター等の市施設が大半である。 レファレンス52件の質問手段の内訳は観覧者13件、来館19件、電話17件、Eメール3件であった。観覧者や質問のために来館した件数が大きく増加した。コロナが着着きの傾向にあったのも要因のひとつかもしれない。 《情報発信》 ホームページのアクセス数は指標値を大きく超えている。ログ解析の結果、スマートフォン利用者数の増加と、当館ホームページを知った媒体では、Twitterからのリンクが圧倒的に多いことが判明した。SNSの影響が顕著であり、今後もこの傾向が続くとみられることからSNSとの連動した情報発信が重要になってくる。フェイスブック投稿回数は、展覧会やイベントの実施回数の増加とともに増えた。また、令和5年1月より吹田市公式LINEセグメント配信を開始した。情報発信のあり方を継続して検討していく。 本年度の取材・報道は、テレビが4件、新聞が5件、広報課1件であった。取材・報道の内容は特別展等に因んだものが主である。その他には事件発生から70年目にあたる吹田事件に関する新聞取材があった。10月に吹田事件をテーマにした講演会を実施しており、話題性のある企画がきっかけとなったと思われる。	自 己 評価点	【外部評価】 大規模改修に向けたスケジュールについて、市役所内での合意形成が進展した点は画期的である。市民の意識調査については予算が見送られたが、着実に進んでいる。昨年も指摘したが、数十年に1度の貴重な機会であり、リニューアルの実現に確実に繋がるとともに、展示内容を精査し、展示論の到達点を踏まえたリニューアルとなるよう期待している。しかし、リニューアルは予算計上したことをアピールするのではなく、どのような魅力的な提案をまとめているのかを成果とすべきである。それができていないのなら成果ではないということも指摘しておく。 また、常設展示は大規模リニューアルもよいが、今後30年間同じ展示が続くよりは、年2回の特別展の目玉展示品を特別展終了後に常設展示に出すなどで、常設展示のマイナーチェンジを絶えず続けていくことはできないか。秀吉の禁制とか出口座の人形などの目玉展示物を見逃した人もいるだろうし、引き続き見たい人もいいるだろう。 特別展等の企画展は、市民実行委員会の企画を含めて完遂できており、加えて千里ニュータウンの巡回展まで実施できている。あわせて西村公朝資料を活用した展示も実施できている。「さわる月間」は一部内容に未実施があるものの目標達成はしているが、展示内容を「仏像を手でさわれる」ということなどをもう少し宣伝するなど広報にも工夫をこらしてもいいのではないかな。 展示の評価については問題点がある。「展覧会の目標」と「目標の達成度・自己評価」が対応していない。評価点は展覧会の目標の達成度で評価しているか。展覧会を機に整理や収集が進める、といった目標もあっても良い。入館者数やアンケートの肯定的回答の割合だけで判断していないか。博物館がその展覧会を事業として実施するのはどういう目的か。館内ではつりさせてほしい。 地域学習支援については、指標・目標どおりに実施し、基本項目においても達成できている。参加者の減少については、未だコロナ禍の外的環境の悪さから外出控えの影響が大きいものと思われ、イベント等の参加者数の減少は致し方ないことである。 ホームページのアクセス数は堅調で45,000回に達して指標値を大きく超えている点は、注目すべき成果である。オンライン講演会・講座の年間総視聴回数が80,000回に迫り、フェイスブックへの投稿も回数が増大し、目標を超えた。また、LINEセグメント配信を開始するなど、新時代に相応しい情報発信の体制を創っていく意欲が充分感じられる点ではある。SNSでの発信や新聞報道への働きかけなど、続けられることを期待しているが、こうした状況は、情報発信について強化すべき方向性を示しているだけでなく、事業評価の小項目の見直しに繋がるかもしれない。 一方で、フェイスブック投稿は、展覧会やイベント告知以外の博物館独自の発信内容を検討するべきである。専門性や個性(解説が巧みとか、着眼点が斬新など)において、あの博物館にはあの学芸員がいるといったある意味でスター性のある学芸員を、インターネットで発信することも重要に思われる。また、SNSについてはもう少し本庁と交渉して独自のアカウントを持ってもいいのではないかな。さらに博物館をWi-Fiフリーにするのも希望するところである。		
(小項目)	(重点項目) a. リニューアル	指標・目標	リニューアル計画の進捗度	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(重点項目) b. さわる展示	指標・目標	「さわる月間」の開催 (1回/年)	A					
		実績	実施						
(中項目)②企画展示									
(小項目)	(重点項目) a. 特別展等の開催	指標・目標	展示目標は達成できているか。	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(重点項目) b. 西村公朝資料の展示と活用	指標・目標	展覧会は実施の有無	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) c. 企画展示の中期計画立案	指標・目標	展示の中期計画立案の有無	A					
		実績	立案した						
(中項目)③地域学習の支援									
(小項目)	(重点項目) a. 多様なイベントの実施	指標・目標	イベント回数 86回／年 参加者数 4,004人／年	A					
		実績	イベント回数 89回 参加者数 2,751人						
	(基本事業) b. 出前講座・依頼講座	指標・目標	出前講座回数 29回／年 参加者数 1,010人／年	B					
		実績	出前講座 22回・参加者数 482人						
	(基本事業) c. レファレンス業務	指標・目標	レファレンス件数 36件	A					
		実績	レファレンス件数 52件						
(中項目)④情報発信									
(小項目)	(基本事業) a. ホームページ	指標・目標	アクセス数 37,840回／年	A					
		実績	アクセス数 45,477回						
	(基本事業) b. ソーシャルメディアの活用	指標・目標	フェイスブック投稿回数 21回／年	A					
		実績	フェイスブック投稿回数 36回						
	(基本事業) c. 広報の充実	指標・目標	取材・報道件数 17件／年	B					
		実績	取材・報道件数 10件						

(大項目) 3. 市民と協働し、ともに活動する博物館											
目 標		市民が主体的に博物館の活動に参加できる市民参画を推進します。市民の視点に立ち、市民が集い、市民の参加を得て、希望や意見を反映させる市民とともに創る博物館をめざします。そのための博物館のサポーターとしてボランティアをはじめとする博物館を支える多様な人材を組織します。									
(中項目) ①市民参画と協働				自 己 評 価 点	【自己評価】 《市民参画と協働》 ボランティア活動は活動人数・活動日数ともコロナ以前並みに回復した。新たな取り組みとして、本年度は資料調査における市民との協働との観点から千里ニュータウン地域にある野外彫刻の調査を行った。 令和4年度夏季展示実行委員会は、オンラインでの会議も併行しながら再開実施することができた。令和5年度実行委員会は例年より早く12月に立ち上げたが、実行委員数や活動期間について、コロナ後の実行委員会のあり方を検討していく必要がある。 アンケートについては、令和4年度は5回の企画展示ごとに来館者向けのアンケートを行った。来館者全員にアンケート用紙を配付しているが、回答率は全体平均で6.9%で、伸びなかった。回答しやすい設問の工夫が必要かもしれない。 イベント回数をコロナ以前に近い状態に徐々に戻していく中で、市民講師と市民協働事業の回数も増加した。 《紫金山公園ビジターセンターの建設準備》 土木部公園みどり室による紫金山公園魅力向上事業が令和5年度よりスタートする見込みであり、公園内の博物館の役割と紫金山公園ビジターセンターの見直しは其中で再度協議していくことになる。	自 己 評 価 点	【外部評価】	外 部 評 価 点			
(小項目)	(重点項目) a. ボランティア活動の支援	指標・目標	活動人数 470人／年 活動日数 65日／年	A		A	市民参画に関する多くの項目で日数・参加者ともコロナ禍前の実績を殆どの項目が上廻っており、意欲的に活動している。自己評価点が前年度のBからAへと改善しており、コロナの感染拡大以前の状況に戻りつつあると実感ところである。 重点項目に挙げるボランティアとの協働については展覧会や近代資料整理で活動を回復しており、市民と協働した千里ニュータウン地域の野外彫刻調査という新たな取り組みを開始し実現している点が評価できる。市民実行委員会による展示については令和4年度夏季企画展の活動、令和5年度に向けての活動ともに再開できており、ともに目標を達成できている。こうした取り組みを継続するためにも館報に市民活動の報告書(研究発表)を掲載することは市民の励みになる。また、インフラ整備として博物館の近くに飲食ができる建物がほしい 市民参画の評価のためには、担い手の実行委員会やボランティアさんなど、協働する側の意見・感想・要望を集約することが必要である。今後の改善を望む。 アンケートについては、自己評価に記載されているとおり、回答率を上げるため見直しを期待する。	A			
		実績	活動人数 延べ516人 活動日数 延べ97日								
	(重点項目) b. 市民実行委員会による展示事業	指標・目標	実行委員参加人数 19人 実行委員活動日数 61日	A							
		実績	実行委員参加人数12人 実行委員活動日数264日								
	(基本事業) c. アンケートの実施	指標・目標	企画展示実施回数 (令和4年度は5回)	A							
		実績	アンケート実施件数5件								
	(基本事業) d. 博物館事業への市民の参画	指標・目標	市民講師件数 31件 市民の原稿執筆件数1件	A							
		実績	市民講師件数 46件 市民の原稿執筆件数8件								
	(基本事業) e. 市民団体との協働事業	指標・目標	連携事業件数 3件	A							
		実績	連携事業件数 3件								
(中項目) ②紫金山公園ビジターセンターの建設準備											
(小項目)	(基本事業) a. 紫金山公園ビジターセンターの建設	指標・目標	ビジターセンター建設計画の進捗度	B							
		実績	自己評価欄に記載								

(大項目) 4. 社会とともに歩む博物館									
目 標		学校、児童、生徒の利用を促進するため、小中高校の教職員と連携や利用プログラムの開発を行い、子どもたちが博物館に親しむ機会を増やします。また、博物館のもつ高い専門性や豊かな情報を社会に還元することで、地域のイメージアップや学芸員のスキルアップにつなげ、博物館活動にフィードバックさせます。							
(中項目) ①連携				自 己 評 価 点	【自己評価】 《連携》 新型コロナウイルス感染症によりネットワークの活動を休止せざるを得なかった影響は大きかった。ネットワークの活発化に向け、再整備が必要である。西国街道連携事業は中止となった。 《学校教育との連携》 特別企画「むかしのくらしと学校」は、コロナ対策のため実施できなくなっていた「さわる・ふれる・実感する」体験型展示が復活させた。学校側の教育活動制限の緩和もあり、小学校団体見学は23校で前年度より大きく増加した。出前授業は10校で、うち1校はオンラインで中継した。 教職員研修は講義(吹田の歴史)、ワークショップ(学校の博物館利用について)を行った。参加者は23人で、こちらも増加した。 令和3年度に作成した『吹田の歴史にふれてみよう』デジタル版について学校側の意見や改良点を聞き、双方で引き続き検討をしていくこととなった。 《人材育成》 館園実習の受入はコロナ禍以前に戻したが、全体としての展示実習は見送った。実習内容は歴史・考古・民俗・美術の各分野ごとに設定し、ワークショップや資料調査などを行った。インターンシップは2人・のべ9日で実施した。JICA研修は受入要請なし。	自 己 評 価 点	【外部評価】 北大阪はじめ他機関との連携事業については、目的から改めて検討されたい。重点項目とする北大阪ミュージアムネットワークのシンポジウムは開催できたが、参加者7名という状況となっており、新型コロナウイルス感染症拡大の影響がまだまだ大きい。活動自体の点検も必要であろう。北大阪ミュージアムネットワーク・西国街道ネットワークの今後については検討すべき時機に来ているのかもしれない。 学校教育との連携については、「さわる・ふれる・実感する」体験型展示を復活させた「むかしのくらしと学校」展の学校団体22校の利用があって子どもたちの反応もよく、出前授業10校を実施できている。出前授業では1件のオンライン実施もあり、コロナ禍を経た後の学校連携の手法の実践もできている。学校団体見学校数の増加、出前事業件数が増加しコロナの感染拡大以前に戻りつつあり、安心した。 また、学校の教職員研修にも力を入れていることはたのしいことであり、ワークショップ等も行い、参加者が増加したことは評価する。 学校教育との連携は博物館だけが努力しても無理で、教育委員会の側でも連携について努力を重ねていかないと実績を上げるのは難しい。教育委員会など組織側の改善も期待している。	外 部 評 価 点	
(小項目)	(重点項目) a. 北大阪ミュージアム・ネットワーク	指標・目標	事業実施件数	1回/年		A			
		実績	事業実施件数	1回					
	(基本事業) b. 他機関との連携事業	指標・目標	事業実施件数	1回/年		B			
		実績	事業実施件数	0回					
(中項目) ②学校教育との連携									
(小項目)	(重点項目) a. 学校教育による利用の促進	指標・目標	学校団体見学校数	18校 出前授業件数		7校 教員への研修		6回/年	A
		実績	学校団体見学校数	23校 出前授業件数		10校 教員への研修		1回	
	(基本事業) b. 学校教育への支援	指標・目標	設定していない			B			
		実績	自己評価欄に記載						
(中項目) ③人材育成									
(小項目)	(基本事業) a. 実習・研修等の受け入れ	指標・目標	実習受入11校・人数24人 インターンシップ人数1人 JICA研修受入人数			A			
		実績	自己評価欄に記載						